

浄土

1983-9

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 運輸省 (特別授受承認雜誌) 第三二五号
昭和五十八年八月二十五日印刷 昭和五十八年九月一日発行
第四十九卷 九月号





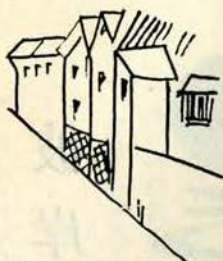
秋　の　お　彼　岸

九月の涼風が肌に快い時候となりました。暑かった夏の生活を何とかしのいで、ようやく秋風秋氣に心身を落ち着かせることができるようになりました。穏やかな氣候のもとで、仕事に勤しみ、勉学に励むことができれば、これはまたこの上なき幸せです。健康に恵まれて、その務めとすべき本分に精一杯の精を出し、怠りなく生活いたすことが何よりの幸せなのです。

秋のお彼岸の一週間は、そうした私たちの日常生活の中で、ひと時、こころの世界、いのちの世界に思いを馳せて、ゆくりなく平穩無事の生活を確認するための日柄といってもよいでしょう。丁度、日と夜の時間がまったく同じになる秋分のお中日をはさんだ一週間です。いわば季節の変わり目、月日の節し目にあたっているわけです。このような好季に、私たち自身のからだところをオーバーホールして、ゆっくりと養生することが大切なのです。時々刻々、一日一日、まことに休む間もない忙しさ、慌しさの現実生活です。時には一切を忘れた、わがいのち、わがこころの奥深くへ休らざる余裕も必要ではないのでしょうか。皆様の安穩にして、つつがないご生活をお祈りします。

(宮林昭彦)

『 九 月 号 』



かの智慧の眼(まなこ)を開いて
この昏盲の闇を滅し、諸の悪道
を閉塞して善趣の門に通達せし
む。

——『無量寿経』四誓偈

目 次

法 話

- 彼岸に想う……………江 目 達 雄……(2)
- いのちの教化……………耕 田 八 洲……(10)
- 〈ずいそう〉 感謝の合掌……………川 端 信 明……(7)
- 「目には青葉」の句碑にちなみて……………鈴 木 俊 善……(16)
- (一)(口)(法)(話)
- 孝は百行の本なり……………村 瀬 秀 雄……(20)

特別寄稿

- どこに向けて邁進するのか……………坂 本 守……(22)

エッセイ

- 卒業式前後(二)……………木 下 隆 一……(27)

- 敬老の日に思う……………福 島 瑞 江 ……(34)

仏教行楽日記

- 九月の行事……………鷲 見 定 信……(44)

〈読者のページ〉

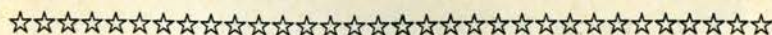
- 私の輪廻観……………島 田 信 一……(40)

- 浄土句集……………一 田 牛 畝 選……(32)

- 〈表紙裏・巻頭言〉 秋のお彼岸……………宮 林 昭 彦

表紙 大西耕三画

カット 大正大学美術部



二法 話二

彼岸に想う



春と秋のお彼岸は、真夏のおぼんとともに、日本人のくらしの中にとけこんだ、年ごとの仏教の行事となっています。どここの家庭でも、仏さんにおはぎや彼岸だんごなどを、お供えます。お寺におまいりし、祖先の墓前に香を焚き、花を飾ります。わたくしの地方では、春のお彼岸には、百万遍数珠を繰りながらお念仏を唱える「廻り念仏」の行事も、行なわれています。

江^{こう}目^{のめ}達^{たつ}雄^{ゆう}

(山形市迎接寺住職)

春のお彼岸のころは、東北地方の春はまだ浅く、雪の降ることも珍らしくはありません。しかし、大地には草が萌え出し、樹木の新しい芽は、動き出しています。寒風の吹く河原には、ネコヤナギが羽毛のような銀色の花をつけています。あの銀色の花のひとつひとつは、雌花と雄花のそれぞれの数百ずつの集り、花の穂だということです。

ながい冬がようやくあけた春彼岸のころ

は、大自然のいきいきとしたいぶき、その精妙ないとなみを、いちばん身近かに感ずる季節のようにも思えます。

暑い夏も終って、さわやかな秋風の吹く秋のお彼岸のころは、空の美しさがなんともいえません。

秋の空露をためたる青さかな 子規
秋空や高きは深き水の色 東洋城

澄みきった秋空を仰いでいると、果てしない虚空の彼方に、誘いこまれてでもいくような、そんな気持ちになってしまいます。

秋は、みのりの季節です。豊かな天地の恵み、大自然に生かされているよろこびを、誰しもが感ずることでしょう。

春と秋のお彼岸、即ち「彼岸会」は、春分と秋分の日を中日として、前後三日間ずつの

七日に亘る行事です。我国の彼岸会の行事は、とおく聖徳太子のころにまで溯るといいますが、確かなことはわからないようです。しかし平安時代に入ると、もうひろく行なわれていたようです。

春分の日も秋分の日も、太陽は真東からのぼり、真西に没します。日の没する彼方は、阿弥陀仏の西方浄土のあるところ です。西方浄土への往生のねがいをこめて、春と秋の彼岸会が修されるようになったと、いわれています。

もう数年前のことですが、わたくしは、インドの仏跡巡拝の旅の折、すばらしい落日の景観に接しました。お釈迦さまのご生誕の地ルンビニーから、バリランプールという町へのバスの車中のことです。真紅の太陽が、まさに地平線の彼方に沈もうとしていました。空は一面に茜色に染まり、いく筋かの雲は紫雲となつて、まわりは金色に輝いています。日が沈むにしたがつて空の色は微妙に変化

し、やがて太陽が真紅の一線となって没すると、闇がおもむろに、あたりを支配しはじめます。

まことに感動的な、そして瞑想的なドラマでありました。わたくしは、『観無量寿経』の日想観を心に浮べていました。

有目の徒は、皆日没を見る。まさに想念を起し、正しく坐して西に向い、あきらかに日を観ずべし。心をして堅住ならしめ、想いを専らにして移すことなく、日の没せんと欲して、そのかたち懸鼓の如くなるを見よ……

中国の善導大師は、『観経疏』の定善義において、太陽が真東からのぼり真西に没する春分と秋分の日には、『観無量寿経』の日想観を修して、日の没する彼方に極楽浄土を思い、往生を欣求せよとするされています。

彼岸会の行事は、インドにも中国にもな

く、我国独特の行事であるといいますが、そこには浄土思想の影響が、つよく反映しているかのようです。また、古代日本人のロマンチズムを感じます。

彼岸とは、彼岸に対することばです。

此岸は、生きたり死んだり、泣いたり笑ったり、悩んだり苦んだりしているこの現実の世の中です。浄土教の立場でいえば、穢土です。

これに対し彼岸は、苦しみや悩みを越えた理想の世界、即ち浄土です。

汚れて苦に満ちた穢土を離れて、あのきよらかな美しい浄土への往生を願えと説くのが、浄土門の教えです。

我国の浄土教は、比叡山に常行三昧堂が建てられ、不断念仏が修せられるようになってから、しだいに広まっていきましたが、浄土教の普及に、殊に大きな役割を果たしたの

が、恵心僧都源信（九四二—一〇七一）の『往生要集』です。

恵心僧都は、比叡山に登り、僧都の位にまで出世しましたが、突然、横川に隠棲して念仏の行者となり、四十三歳の秋から翌年の春にかけて、『往生要集』を書きました。この本は当時のベストセラーとなり、いろんな分野に、建築、絵画、彫刻などにも、はかりしれない影響をあたえました。

『往生要集』は、地獄の描写にはじまり、まず六道を叙述します。六道とは、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天の六つの世界です。いずれも不浄な苦の世界、穢土です。最初の、凄惨な地獄の描写は、いまもなお読む人をして、慄然とさせずにはおかないでしょう。

嫌悪すべき穢土の有様を、徹底的に示めたあと、うるわしくもきよらかな西方浄土のすがたを描きます。そして、穢土を厭離し、浄土を欣求せよと勧めます。

ではどうすれば穢土を離れ、浄土に往生す

ることがきるのでしょうか。『往生要集』はその方法として念仏を説きます。しかしここで説く念仏は、観相の念仏です。あのうるわしい浄土の莊嚴を、殊に円満具足せる阿彌陀仏のおすがたを心に思え、光あふれる浄土の世界を日夜に観相して三昧の境地にたつしたとき、極楽浄土はいつも頭の中に浮ぶであらう。そうすれば来世は必ず浄土に生れることができるかと教えます。

世間的な道徳を守り、仏の教えを尊び、寺院や塔を建てることも、往生の因となるとも説いています。

しかし、観相の念仏により、三昧の境地に達するということは、誰にもできるといふものではありません。専門の坊さん、それも修行を積んだ高德の坊さんにして、はじめてなしうる行です。また、造寺造塔も、当時の王朝貴族は競って華麗な寺院を建立しました。が、余程の金持ちでなければできません。即ち、浄土への往生は、まだすべての人には、

開かれていませんでした。浄土の救いが、万人のものとなるためには、宗祖法然上人の浄土開宗を、俟たなければなりませんでした。

平安末期から鎌倉初期にかけては、我國の歴史において、未曾有の変革期です。変革期には、動乱がつきものです。この時代も、保元の乱、平治の乱ついで源平の争乱とつづきます。加えて天変地異が相つぎ、まさに末法さながらの乱世でありました。人々は、あたらしい救いの道を、渴望していました。

こうした時代の要求にこたえ、偉大な仏教者が相ついで現われますが、まず最初に、宗教革新ののろしを掲げたのが、法然上人でありました。

法然上人は、念仏を説きました。しかしその念仏は、恵心僧都が『往生要集』で説いた観相の念仏ではありませんでした。口称の念仏、口で南無阿弥陀仏と唱える念仏です。

浄土に往生するためには、智恵も戒行もいらない、ただ南無阿弥陀仏と唱えるだけでよい。何故ならそれは、阿弥陀仏の本願だからである。浄土への救いは、阿弥陀仏がすでに用意されているのである、という教えです。

口で南無阿弥陀仏と唱えることは、誰にもできます。いつでも、どこでもできます。ただそれだけで浄土に往生できると、智恵第一と評判の高い法然上人がおっしゃるのです。日々の生活に苦しみ、来世の救いにも絶望した人々に、この教えがどんな喜びをもって迎えられたことか、いまのわたくしたちには、想像もつかない感動であつたでしょう。まさに暗夜の灯の如く、人々に生きる希望をあたえ、いのちの尊さを、教えたにちがいありません。

秋の彼岸を迎え、わたくしたちの祖先が、いかに法然上人の念仏の門に救われたかを、思います。そして、法然上人の遺徳の大きさを、あらためて感じます。

ずいそう

感謝の合掌



川端信明

(岩槻市浄国寺住職)

天地の恵みは判っているが、慣れすぎているため、日常、特に感じないで過ごしてしまいがちである。

都会に住んでいる人は、田舎に出れば、空気が実に美味しいと頻りにいう。生き埋めになった人がほんの僅かな空気の穴によって九死に一生を得た話を聞く。

真夏の涼風は、クーラーや扇風機により涼を取るよりも健康的でまた爽快である。日本の海岸は、長年にわたる潮風によって外国人からも絶景と賞讃されていることは、多く知

られている。

曾て、東京、高松、福岡では、渇水のため生活の不自由を余儀なくされ、多くの人が、この時ほど水の有難さを痛切に感じたことはないであろう。また、水力発電により諸企業に大きく貢献していることは、周知のとおりである。

水と豊かな土地と太陽により樹木、植物を育成し、用材、果実等をもたらし、地上に緑を与えている。

この限らない天地の恵みを直接享受しているのが、毎日いただく三度の食事であろう。農業あるいは漁業等に従事している人々の貴い労力によって食卓に運ばれる天地の恵みである。食べ物に心から感謝せずにはいられない。

食堂、会合等で出されたものを食べ散らかすのは、勿体ないことであり、食べ残したものを持ち帰る姿は実にすがすがしい。

八年前、ハワイに旅し、添乗員に教えて貰って日本人経営の料理店に入ったところ、店の一人がフォークとナイフを巧に使い、リズムカルに金属音を鳴らして、肉片を一メートルほどはね上げながら鉄板で焼く、珍しい料理店であった。私の隣席にカナダ人で三十五歳位の夫婦が割箸で喜々と談笑しながら食べ方の練習をしていた。やがて一個の肉片が各人の皿に乗せられた途端、この夫婦の談笑が止み、二人とも頭をテーブルより下に伏したので、腹痛でも起したかと思い、覗きこんだところ、食前の祈りを捧げている尊い姿を見て、自分の箸をとるのも忘れ驚嘆した。

その後、ある研修会で講師が次のことを語られた。

親しいアメリカ人から次のような質問を受けた。

「日本は、仏教国なんでしょう。然し、不思議でならないことは、アメリカに駐在して働いている者も、アメリカのいたるところに観光にきている者も、食事の時、感謝の合掌をしている日本人を未だ一回も見たことがないが、どうしてでしょうか、教えて貰いたい。」

この問いには、全く、答える術もなく、唯恐縮するばかりで身の置き所がなかった、と述懐していた。

国内においても食堂等で、食事の時に感謝の合掌をしている人を殆ど見ることはできない。無抵抗の老年浮浪者を苛め、死に至らせた者が中学生であるというショッキングな事件、生徒の暴力行為のため、警官を配置しなければ卒業式が行えない中学校が多く出たり、一部の父兄の抗議に耐えかねて死を選ぶ中学校長が出たり、大学の不正入学、不正国庫補助金請求、教授のポストを廻る贈収賄等、予想もできない痛ましく、また情ない不詳事が続発している。

これらは、加害者、被害者ともに幼少時から親、大人による躰の不足又は知識以外の重要な部分を占める人間としての修練の欠如に帰因しており、残念でならない。

一見、迂遠のことに思われるが幼少時から生涯を通じ、三度の食事に感謝の合掌、口称念仏を実践することが人間の基本的形成の一つとして緊要なことではなからうか。

このことを身につけることによって良心、畏敬、仏心、人命の尊重を確認し、更に仏恩、父母の恩、師の恩に対する感謝を深めていくことになると考えられる。

法 話

いのちの教化



耕 田 八 洲
こう だ はっ しゅう

(広島市清住寺住職)

既によく周知のことではありますが、近時、社会情勢が激しく変ってゆくにつれて、犯罪や非行の形が益々、複雑さまざまの状態となつて現われてきており、特に青少年非行は、急激に増加しているばかりではなく、低年齢化或いは、一般化が進み、学校内・家庭内での暴力事件、シンナー・覚せい剤などの薬物

の乱用とか又は、暴走族による種々の暴力事件、その他、悪質な重大事件が多発するなど、自分自身ならびにその環境の破壊が、私どものごく身近かで、しかも、いとも安易に平然と行われているのが現実の世相となっているのでありまして、尊い人の命が頗る軽視される風潮が現われてきており、まことに憂慮す

べき、なげかわしい現状なのであります。

仏教の言葉で、よく言われます凡夫というのは、常に心のうえに自我という根強い妄念執着の偶像なるものを持っているのでありまして、わが身が尊い、わが身が可愛いとして、他人を軽べつし、自分の利益と享楽のためには、他人を陥れても少しも悔いはないというものであります。

ともかく、凡夫というのは、食べたい、飲みたい、遊びたいと、欲があるがために惑うのであります。金が欲しい、着物が欲しい、車が欲しい、家が欲しいと、からだがあるがために惑うのであります。憎い、可愛い、悔やしい、悲しい、腹がたつと、感情があるがために惑うのであります。賞められたい、愛されたい、出世したいと、自分(我)があるがために惑うのであります。離れたくない、別れたくない、死にたくない、執着があるがために惑うのであります。

物があり、からだがあり、欲があり、情があり、自分という我があるから悩みがあり、惑いがあるのでありますが、すべて有ることは、禍いとなって現われてくることのあるのであります。

又、いかに楽をして、いかによりたくさん享楽を受けようかという妄想が、さまざまな犯罪、非行を誘発させるのではありますまいか。

そして、私どもの根強い煩惱妄念執着から、心の平和、家庭の平和、社会の平和が乱れるのであります。自我に執着し、名誉に執着し、愛欲に執着し、こうした多くの執着が社会の平和を乱すのではないでしょう。

「人間を尊重せよ、個人の自由と権利を守れ」と教えられますと、自分という人間だけを尊重して、他人という人間は、少しも尊重しようとしなくて、自分の権利と自由だけをしっかりと守って、他人の権利と自由には、全

く無関心なのであります。

自分の権利を、勝手や、気ままと間違えて、他人の立場や、迷惑を考えず、自分だけの意見を主張したり、勝手な行動する人が多く見られるのであります。自分の権利を主張することは当然のことではありますが、同時に、いかなる場合にも、自分以外の全ての人の権利も等しく認めなければなりません。所謂、「人權の共存」ということを考え、お互いに相手の立場にたって、物事を考え、行動することが肝要であり、豊かな人間関係をつくることには、どうしても、ここに、宗教情操の必要性が痛感せられるのであります。

なお又、現実の社会では、利害関係の「もつれ」の頗る多い世の中であります。自己の利益のため、又自由のためには、相手の立場を顧みず、自己の主張のみを通そうとすることから、裁判所に持ち出される調停事件にも、現在は各種の見にくい対立が数多く見ら

れるのでありますが、双方共に自分の立場を強調すれば、対立関係は、いつまでも存続することとなり、解決はおろか結局は双方ともども不利のまま、精神的の苦悩が日夜いつまでも、つきまとい或いは感情的となり、神経をお互いにスリ減らしてしのぎを削るという次第であります。

利害の対立関係において、双方共に良い条件というものは、全くあり得ないものであります。相手の譲歩を要求する前に、先づ自分が譲歩の気持ちとなる、即ち双方における「互譲妥協の精神」が肝要であり、所謂、「人に勝つより、自分に勝て」という心は、やはりここにも宗教情操の必要性が感ぜられるのであります。

最近の物質文化は、驚異的な発展をみせている半面、精神文化の方は、社会的不安、退廃的な世相にも見られる通り、一向に進歩の気配がありません。両方が相調和して進まな

くては、本当の人間生活は営まれません。精神文化を中心とした日々の物質文明生活でなければ、真の発展は望めないと思うのであります。

さき程、申し述べました如く、特に青少年非行は黙視することのできない現状であります。「昭和五十七年度・青少年白書」によれば、青少年非行の原因について、次のように指摘しております。

物質的豊かさによる甘やかしや、家庭生活の厳しさの欠如など、家庭に於ける親の權威や指導力が低下し、校内や家庭内で暴力を振った少年の親の養育態度は、溺愛か、放任が多く、少年の性格は、気まま、わがまま、自己中心性が強いという特色があるとしており、又、忍耐力がなく、人を頼りにするという性格の弱さの一面もあり、教師の指導力や、人間的魅力が乏しく、地域社会でも他人への関心が低下していることなどが、相俟って青少年非行の発生の広がりをもたらししているとい

うのであります。

なお、少年非行の主因は、家庭にあると考える人が増加したことは、重視すべきことでありますが、問題なのは、家庭での非行防止策の確立方法であり、個々の家庭の問題を、地域の問題として提起し、それによって、家庭、学校、地域の結びつきを強め、少年非行防止の住民運動を高めねばならないと思うのであります。

なお又、非行対策には、即効薬はないだけに、きめ細かな対策を積み上げていくことが必要であると思うのであります。

犯罪や、非行のない平和な社会で幸福な生活をおくることは、すべての人の願いであります。しかし、犯罪や非行は毎日、各地で数多く発生しているというのが現実の姿であります。このため犯罪、非行防止活動も、一致協力して忍耐強く続けられてはいますが、世の中には、不幸にして犯罪や非行を犯した人

も沢山あり、こうして犯罪者、非行少年と呼ばれるようになった人たちも、更生するために、精一杯の努力をしている者も少なからずあるのであります。

更生保護の「更生」とは、まづ本人自身が立ち直ろうとする自らの努力、即ち「自力更生」の意慾の現れが主体でありまして、それが前提となつて始めて、あとの保護、即ち、保護司などの側面からの助力、助ける働きかけである保護観察、補導援護などの努力が必要であるというわけでありまして、即ち所謂、「自力」と「他力」の両々相まって更生保護の目的が達成されるというものであります。

犯罪者予防更生法には、「その者に本来、自助の責任があることを認めて、これを補導援護することによって、その改善及び更生を図ることを目的とする」と記されております。又若し、本人に「自助の努力」のあることが認め難い時でも、その本人に対して自覚と賦活を促すように「他力」を必要とすることも

あるわけであります。

近頃、「ボランティア」という言葉を、よく耳にするのでありますが、この「更生保護」の仕事において、陰に陽に働きかけをする、この（保護司）活動の精神は、無量寿經の「不請之友」のことであり、又、人間愛を基調とする菩薩の大慈悲の現れの姿でなければならぬと思うのであります。

実に、仏教教化こそ、青少年非行の予防薬であり、今更ながら六波羅蜜の教えは、古今東西においても、最も適切緊要なものと思うのであります。

○布施 人に情愛をかける。

○持戒 約束や規律を正しく守る。

○忍辱 苦に耐えて、いつも仲よく、微笑の生活をする。

○精進 何ごともまじめに励む。

○禪定 心をおちつけて、精神を統一し、

心を乱さない。

○智慧 物ごとに惑わされることなく、正

しく物を見きわめる心をもつ。

考えますと、今日ほど個人の尊重されたことは、かつてなかったであります。また今日ほど、人間の生命、基本的人權の尊重されたことも、今までなかったと思います。います。にもかかわらず、今日ほど、人間の生命が粗末に軽率に安易に扱われていることも、今までなかったと思います。

毎日の新聞が、さまざまの血なまぐさい、目をおおうような事件を報道しております。

私どもは、まづひとりひとりが自分の生命の貴いことを知らねばなりません。自分の生命の貴いことを知るものにして、始めて他人の生命の貴いことがわかるのであります。そして、全ての生命の貴いこともわかるのであります。二度とない人生、やり直しのできな

い人生、なにもものにもかえられない大切な人生であります。

純粹な人間性の美しさ、おおらかさ、広さを見つめて、そこに自己の安定の場所を求めて行くことが、私は宗教を求めるということであり、念仏を求めることだと思っております。

特に浄土教的宗教情操により、家庭ならびに地域社会の浄化のために、日夜、教化活動に挺身し、現在の社会状況に対応して、私共の生命とするお念仏によって、この世の中における全ての非行、犯罪をなくすることが、大きな悲願であり、強く、正しく、生きる喜びを与えることが、私どもの使命ではないかと思っております。

掌を合わし、明るく、強く、大切に

正しく生きよう、我がいのち



目には青葉

山ほととぎす

初鰹

“目には青葉”の句碑にちなみて

すずき しゅんぜん
鈴木俊善

(東京・文京区厳浄院住職)

「目には青葉山ほととぎす初鰹」の句は、口吟む人が多い。さてその作者はとなると知る人は少ないのではなからうか。若葉の句う頃ともなれば此の句の目のさめるような季節感是人々の心を揺るのであらう。

その作者たる「素堂翁之墓」が白山下の厳浄院に有

る。その碑文によれば「素堂、姓は山口名は信章、米雪と云、寛永十九壬午年正月四日生れ、享保元丙申の年八月十五日に死す、寿七十有五 明和元年申申の歳四十九の春秋となるの此、一小碑を黒露建」と有り、今より二二〇年前の明和元年（一七六四）に弟子の黒露が師の五十回



—東京・白山厳浄院にある「目には青葉」の句碑—

忌に建立したもので有る。

甲州文庫によれば、「素堂翁歿して谷中感応寺中瑞音院（今の天王寺）に葬るも墓は現存せず位牌一基を蔵す。甲府尊体寺に山口家代々の墓あり、素堂の碑ありと聞けども不詳。小石川指ヶ谷町厳浄院に山口黒露の建し碑あり」と……。

文京区教育委員会では昭和四十九年三月に「文京区文化財保護条例」が制定され、寺の門前に掲示板を建て下さったこともあり五月、六月ともなればおとずれる人も多い。去る五月二十九日心ろある人々の多年の念願であった「目には青葉」の句碑が翁の墓前に、篤信者、野村憲太郎夫妻により建立されました。高さ七十三センチ幅百二十五センチの神奈川特産の根府川石で創玄書道会杉崎雨泉先生の筆に成り、翁の墓碑にふさわしく、おとずれる人々の喜びをまして居ります。

素堂と芭蕉は北村季吟の同門であり共に江戸に住み、芭蕉の新風開発に際してこれを助けて功を成さしめたが、自らは俳諧を以て天下に鳴ろうとする野心はなく、葛飾風を創めて自適の境を築んだ。葛飾派には黒露、馬光、素丸等の著名な人々がある。小林一茶も江戸に出る

や素丸の門に入ったと言う。(俳諧人名辞典、明治書院刊)

素堂は野ざらし紀行に「心の友とかたりなくさむるよりのしきはなし。ここに隠士あり、其名を芭蕉とよぶ。はせをは己れを知る友にして……」と述べている。素堂が葛飾(深川)に庵を結ぶや、芭蕉も其の川上に庵を結ぶ往来相親み、

川上と此の川下や月を友

の芭蕉の句は二人の友情深きを示したものと伝えらる。

天和二年九月にはその前年焼失した芭蕉庵再興の勸化文を書き、元禄十四年義仲寺に詣で翁の墓前に、

志賀の花湖の水それながら

と手向けている。

×

×

×

かつ「かつお」と言えば「目には青葉」の句が引用され

る。青葉を渡る風が素ハダに快いころ、かつおの味は新鮮だ。現代では女房を質におかなくても庶民の口にはいるけれど、江戸末期今のカネで一本十万円前後もした。ケチな家主に「かつをは片身おれがもらった」と上前をはねられながらも、髪結新三は初かつおにおごりを見せた。江戸っ子がこれほど初かつおを珍重したのは、五月の黒潮にのって相模湾にくる頃、たっぷりいわしを食ったかつおは大きくなり脂がのっているからで、兼好法師など関東人の下品な舌の見本として「鎌倉のかつおを食ふやから」を軽べつしている(読売新聞寸評51・5・29)。何れにしても初夏の候ともなれば江戸っ子は目、耳、口を通して大自然のめぐみに歓喜し、その心意気を示し、その共感が、時代を越えて庶民の心をとらえ、この句が愛されるのであろう。特に緑を失い、気節感を忘れ勝ちの現代の都市生活者に、強く郷愁を感じるのであろうか。

×

×

×

「素堂翁の墓」の裏面に、

元禄八年治甲川濁河救十邨民 建祠祭

焉事詳于治水碑及農功伝 此室翁靈所居

と刻され、元禄八年、素堂翁五十五歳の折に、代官桜井政能の懇請を受けて濁河の三千二百三十間の治水工事を完成し、土民は感激して庄塚に生祠を建て祭った。その徳をしたって戦前は折にふれ、郷里の人々の墓参されることが有った。

自然を感じることは、自然をおそれることもある。今日一般の人々のあまり知らない素堂翁の偉大なる功績と申す可きである。

甲州文庫に「明治三十一年五月本所区原庭町芭蕉山桃青寺に素堂翁の治水碑を建てしが関東大震災に罹り現存せず。甲府市寿町金比羅社内に翁の治水の碑あり」と。元禄八年の治水より二〇〇年を記念してその遺徳を讃えたものであらう。

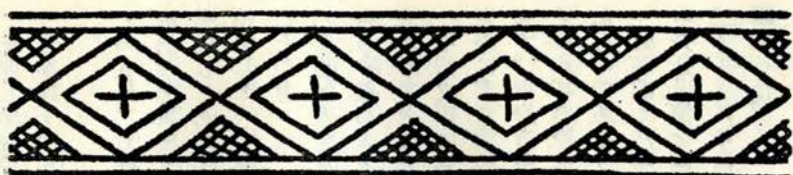
昭和四十六年十一月、翁の郷里北巨摩郡白州町では、中央公民館を建設するに当り、高さ一メートル三〇、横三メートルの巨石に句碑と碑文を併せ建立して翁の徳を顕彰した。

x x x

この拙文は昭和五十三年七月厳浄院開創三百五十年記念に「臨川山 厳浄院記録史」の編輯の折、奇しくも時を同じくして白州町教育委員会、上石神井、高橋啓夫さん、静岡県富士市富士文庫 石川軍治さんより寄せられた資料より抜萃させて頂きました。特に故人となられた高橋啓夫老は、素堂翁の徳を慕い、その足跡を山梨に、静岡に、東京にとたずね、芭蕉―素堂―黒露―馬光―素丸へとその資料をまとめることを念願されておられたのである。その高橋老が、

鮎小鮎花の零を乳房にて

の句を示して、素堂さんにこのように新しい感覚の句がありますよ――と語られた温顔を、昨日のように思い出すことである。



(一) (口) (法) (話)

孝は百行の本なり

むら せ ひで お
村 瀬 秀 雄

ものの道理は身边にあるものであり、また身边にあるから大切なのである。いま大方の人が当然のこととして認め合っている暮らし方はあくまでも権利を主張し合うことであり、対立抗争に打ち勝つことであろうと思う。余りにも孤立した味気ない世相であると考えていた時に、ふと思ひ出したのが「孝は百行の本なり」という言葉であった。これをもう一ついい換えれば、孝養を忘れているところに諸悪の根源があるということであった。

釈尊は観經を説いて往生の業を明かすに當って、初めに「極樂淨土に往生したいと願うならば、まず第一に父母に孝養をつくし、師や先輩に対して敬い仕え、慈悲心をもって殺生せず、十善を行うのである」と教え給うている。このご説法もまた往生を願うような孝ならば孝養を尽さなくてはならぬということである。善導大師は孝養について「子供が成人し、やがて結婚すると妻子ばかりを愛して親を顧みることがなくなる。中には親を邪魔者扱いしたり、甚だしいのは親を憎む者すらある。もし親の恩を忘れ、親に反抗するとき者があつたとすれば、その者の性根は畜生に劣るといわねばならぬ」といって、言葉極めて戒めている。

親に孝養を尽さない者は、何れ後になって自分の子供から背かれることになるのが因果応報というものである。何故なら子供は親を見習って育つからである。近頃親子の隔絶がそれ程問題になっていないようであるが、恐らくこの風潮が行き渡ったからであらう。その原因の一つに親子の別居がある。成人して結婚すれば親より妻子が大切になるのも止むを得ないであらうが、親もまた結婚すれば別居するものと決め、その方が襟度を示すことのように心得ている。しかし一度別居すれば孝養心があってもなくても自然に疎遠になるのは当り前である。親の方でも滅多に会うことがない嫁や孫に情が移らなくて、何年たっても他人とさほどの違いがなくなるものである。成人させた苦勞と引き替えに、急に老いてゆく身を詫しながら佗しく暮してゆくことになる。せめて自分の葬式には集ってくれるであらうと思つて慰めている老夫婦は少しも珍しくない。もう一つの原因は財産相続のあり方である。昔の総領息子ならば親の財産を相続するかわりに、親の世話を初めとして家族の一切の責任を持つだけの自覚を持っていた。それが今では子供の数に應じて財産が分配されるのであるから、総領にだけ期待す

るのも無理があり、総領もまた自分が親の世話をする気になれないかも知れない。それなら親が丈夫の内に処置しておけばよいように思われるが、親子の間での財産のやりとりはもちろんのこと、配遇者同士で金銭の授受があつても必ず税金がかかる世の中である。

孝経に「孝養は道徳の根本であり、同時に教育の根源である」といつているし、礼記には「親孝行の道は人間の宝であり、国の宝である」といつている。それが今では余りにも孝という徳目が軽視されていると思うのは、老いの僻みであらうか。法然上人は熊谷直実に送った手紙の中で「孝養は仏の本願の行でないといつても、ご母堂は八十九歳という高齢である。よく心に掛けて今年などは往生を待っているかも知れないと思つて孝養を尽すのが本当である」と諭している。

かなり以前に鶏を餌つていた。親鳥の後を慕つて歩く雛鳥の姿はまことに可愛いものであつた。それが生長すると今度は親鳥を苛めて餌箱に近ずかせないように追ひ払つていた。こうした姿をみて鶏を飼うのを止めてしまった。大師が畜生より劣るといったのは、このことでもあらうか。

特
別
寄
稿

どこに向けて驀進するのか



坂本 守
さかもと まもる

(西日本新聞論説委員)

北海道も東端に近い花咲港で、夏早朝のこ
と、旅行者である私を驚ろかすある風景を見
た。

二〇トンていどの漁船から魚が水揚げさ
れ、老若男女一〇人ほどが、市場に出すため
であらう、魚を種数別により分ける選別に忙
しく立ち働いていた。周囲にはたくさんのか

もめが舞い、あるいは地面に憩っている。時
折、商品にならない雑魚を集めたザルから、
魚が撒かれる。数十羽のかもめは先を争って
それをついばむ。何回飛びついても餌にあり
つけない、敏捷ならざる、可哀相なかもめも
少なからずいる。

ところで選り別けがすんだ魚箱が、その辺

に無雑作に積み上げられている。かもめは水中を泳ぐ魚を、飛びながらついばんで食べるすばしこい鳥だ。だからドロボウ猫が、マナ板や買物かごから、魚を盗むよりもっと簡単に、魚箱の魚を失敬できるはずなのに、いっこうにそれをやらない。作業中の人たちもまた、失敬されはしないかとの心配を、毛ほどもしていない。

そのうち、餌として与えようとばらまいた雑魚の何匹かが、おいてあった空の魚箱に入った。地面の雑魚に群がって、またたく間についばんでしまったかもめが、さて箱に入った雑魚をどうするか見ていたが、それには全く食指を動かさない。ここの漁業者とかもめの間には、ちゃんと約束事があるのだ。「地面の魚は食べてよろしい。だが箱の中のものには手を、いやくちばしをつけてはならないし、また絶対つけない」との。

もの言わぬかもめと、人間の間に、どうして約束ができるのだろうか。地元の人に聞いてみた。地元の人、かもめを絶対いじめないし傷つけない。日ごろから大変大事にしているという。

なぜなのか。実は天候が急変し、ガスが出ることの多い海域のことである。コンパスを積んでない沿岸用の小漁船は、急にガスが立ち込めた海上で、陸地の方向を見失うことがある。そんなとき、夕暮になると陸地の巢に戻るかもめの群が、水先案内をしてくれる。かもめには特殊な感覚があって、どんな濃霧やガスの中でも、正確に陸地を目指すという。

危機の際の水先案内、そういうかもめを、大事にするのは当然でもある。それにしても飼いだや飼いだ猫は可愛がってしついてもできるが、この場合は特定の鳥ではなく、群としてのかもめであるから、なかなかそういう具合にもいくまい。しかし人間の側が、感謝の気持ちを含めての共存共栄の申し入れを「態度で示した結果、かもめ族との間に立派に約

束事ができ上がったのであらう。

ところで最近、自民党や財界などから、道徳教育充実の要望が強く、文部省もその方針である。さてどうなるだろうか。道徳教育の必要性を否定する者はいない。しかし敬愛人、国を愛し社会に奉仕するなど徳目を並べて教室で教えても、いかほどの効果があるだろうか。校内・家庭内暴力その他の青少年非行が、それで少なくなるわけではなからう。大人社会の物質文明至上と没倫理、没道徳が徳目押しつけで改まるものでもない。

人間にとって大変大事なことで、いまの社会に欠けているもの、それはなんだろうか。美しいもの、純粹なもの、崇高なものを求めつづけ、そういうものを見たり聞いたりした時、すなおに感動する豊かな心を、いまの日本人は失ってはいまいか。言葉を変えれば「情操」である。それがよみがえれば、徳目を並べて教室で教えなくとも、よい社会になる。逆に道徳教育をすれば、豊かな情操がよ

みがえるものではない。

さていつの世にも新興宗教といわれるものがある。戦後の日本では、新興宗教の政治の分野への進出は目ざましい。伝統を持つ在来宗教も、宗派によっては一時期選挙に取り組んだことがあるが、大部分は撤退して、宗派あげて選挙運動をやるのは新興宗教ばかりだ。

もっとも新興宗教という言葉を厳密に解釈すれば、該当するものは限定される。たとえば、七〇〇年も前に教祖が現われ、その教義を受けつぐ諸系統のひとつだということで、自分たちは新興宗教ではないと主張する団体もある。しかし今日教祖に似た存在があり、その人物を中心に急膨張した教団は、新興宗教に加えた方が常識にかなう。

この新興宗教は「現世利益」を説く。信心をし、寄進をすれば、事業が順調に進んでお金が儲かり、病気がなおり、豊かで幸福な生活に手がとどくようになる」と説く。

人間は弱い。だから何か偉大な力を持つ非日常的・超越的存在にすがりたいという気持ち、潜在させている。だから宗教に入ってゆくことは、ごく自然な心なみであって、いいことである。しかし安心立命は、人間の内面的・精神的な分野でのことである。信心をすることが心に安堵をもたらし、その結果として、やがては仕事に熱が入ったり、氣力の横溢をもたらして病氣も快方に向う、というのが筋道にかなった説き方である。

しかし新興宗教のいくつかは、倒産の危機に見舞われた自営業者が事業をたて直すために、あるいは病氣にさいなまされている人が健康を取り戻すために、信心をしなさいと説く。また信仰していることを態度で示すために、応分の寄進をしなさいという。

昔から祈禱師という存在があった。呪術的な祈禱で、延命・治病・安産・商売繁昌を、求めに応じて行う。やがてそれが地域の信頼を得るようになると、その祈禱師が教祖とな

って、新興宗教的組織に広がってゆく。しかしその多くは、ごく狭い地域的、あるいは小グループの域を脱しない。従って社会への影響も、取りたてて言及するほどのことはない。

しかし現世利益を説く巨大な宗教団体がいくつもでてきたとなると、社会への影響もまた大きい。信心をしなさいといい、そのあかしとして寄進を求める。そうすれば商売繁昌、病いはなおるといって、がめつく集金攻勢をかけ、その金で会館、研修所から保養所的建築物までつくる。それはもう、人間の心、内面の安心立命を求め、豊かな情操を養うことは、全く違う、むしろ反対側の存在である。

信者を選挙にかりたててるとはどんな結果をもたらすだろうか。選挙は票をもぎとることだから、相手を攻撃することからはじまる。ついで公選法をかいぐぐっての集票戦術を必要とする。日ごろの現世利益の説法は、

この鉄火場の合戦場をくぐることによって、磨きがかけられる。その結果功利的人間、物質万能の社会へまっしぐらに驕進させることになる。

こういう社会で逞しく生きるには、道徳や倫理は邪魔物ではない。邪魔物でしかなかった道徳を、学校でいくら教えても、どうなるものでもない。少年たちの非行は、彼らにとっておもしろかったり、楽しかったり、とくをするものであるのだろう。そうであれば見つからぬよう、とがめだてされたり、補導されたりしないよう、上手にすればいいのであり、その上手な方法を見つけるのが、もともと賢明な生き方なんだ、と社会は彼らに態度をもって教育しているのが現状なのだ。

つまり大人が先頭に立って、倫理をかなぐり棄てた、ずるさにおいて最も逞しい生きざまを称讃する社会に突き進んでいる。政治倫理の確立を求める声が強いが、その声にもうひとつ迫力が欠けるのは、多くの社会人、そ

して大部分の政治家が、なにがしかの非倫理に手を染めているからである。

こうして日本社会は、現世利益を説く新興宗教をはじめ、政治家その他社会のリーダーによって、大変住みづらいものにならわってゆく。生き馬の目をぬくような早さで、利益をかつさらう生きざまが善であり、少々の迷惑を他人に及ぼし、社会の平穏をさまたげても、法に触れなければ、あるいは法に触れても見つからなければ、かまわないではないか、というのが常識になつては、世も末である。

かもめと人間が、自然にひとつの約束ごとをつくりあげ、それを守ることにによって共存共栄をする——こういう状態は人間社会の中でこそ、築きあげたいことである。万物の霊長の人間には、それができるはずであり、かつまたその方向に進まなければならない。ところが残念なことに、いま日本人は針路を逆にとっている。

卒業式前後 (二)



イエガー家に厄介になった四日間は、私にすれば大変な毎日だった。日本へ向けて送り出す荷物造りに追われたのである。アールムから持ち帰った物より、もっと多くの物がイエガー家に保管されていた。天袋からガレ-

木^{きの}
下^{した}
隆^{りゅう}
一^{いち}

(随筆家)

ジから、夥しいダンボール箱が運ばれて来た。

「これで全部か？」

と、ひろみに念を押すと、丁度その時、ミシンの指導を終えて帰って来た、この家の末

娘のベッキーが、

「ひろみ、私の部屋にもまだあるわよ」

と言うので、見に行くと、そこにも箱が山積していた。

書籍、ノート類、Tシャツ、Gパンその他の衣料品、履物類……。よくもまあこれだけという思いもあるが、七年間の堆積であれば致し方ないかという思いもある。

「一体どうするつもりだ、これだけの荷物」

「箱に詰めて、日本へ送ればいいんでしょ」

「荷造りは誰がやる?」

「お願いします」

「俺は荷造りするために、アメリカへ来たんじゃないぞ」

とは言うものの、父親というものは娘には弱い。

「じゃあ、入る物と入らない物を仕分けしろよ。そのくらいのことでは出来るだろ?」

その間、女房は高見の見物である。頭に来て、

「少しは手伝ったらどうだ」

と言うと、

「まだ、私の出番じゃないみたいよ」

と、涼しい顔をしている。そして、ひろみが入らないと言ったハーフコートを払って、

「これ、どこで買ったの?」

などと聞いている。

「ああ、それ、それはサンディエゴで買ったんだけど、薄いから、こちらでは全然着られなかったの」

カリフォルニア州のサンディエゴと、インディアナ州のこの辺りでは、緯度差は宮崎と盛岡ぐらいの違いがある。おまけに海岸部と内陸部の違いもある。日南海岸と渋民村の差かと思った時、

やわらかに

柳青める北上の岸辺目に見ゆ

泣けと如くに

という啄木の歌が、ふと頭に浮かんだ。なぜか、疲れているなと思った。

不用品はイエガー夫人に託して、教会へ寄付することになっていた。

「ここで着られない物を寄付したってしょうがないじゃないか」

「ママ、どうしよう?」

「持って帰ったら? 私を着るわよ」

こんな状態だから、作業は一向にはかどらない。

私のストレスは溜まる一方だった。

「ひろみ、荷造り用の箱はどうする?」

「箱ねえ。どこで売っているのかしら。ベッキーに聞いてみよう」

しばらくして帰って来ると、ひろみは言った。

「酒屋で拾ってくればいいって、買うことはないって言うの。これから一緒に行ってくれるって」

「酒屋? ジャあ俺も行く!」

私のストレスは、寝不足と大方は数日間になたアルコール分の禁断症状であった。なにしろ、大学の先生方も、招待された家庭もみな敬虔なクリスチャンなので、酒の気が一切無いのである。

ベッキーの運転する車で町へ行く。

相変らず落ち着いたただずまいの町並みである。

「ここが私の勤めているお店」

小さな洋装店の前を通り過ぎる時、ベッキーが言った。大学で服飾を専攻したベッキーは、週三回、その店で開かれているソウイング教室で、ミシンの扱い方を教えているのである。

目的の酒屋は、その店の裏手にあった。横の空地に、大小様々なダンボールの箱が積み重ねられている。積み重ねられているというより、放り投げられていると言った方が当っているかも知れない。箱の物色は娘たちに任

せて、私は酒店にはいった。様々な種類の酒が所せましと並んでいたが、日本の物は一本もなかった。経沢摩擦を起こす心配は、いまのところ無さそうである。

買物を済ませて店を出ると、十四、五箇の空箱を車に放り込んだ二人は、自動販売器で買ったコーラを飲みながら、私を待っていた。

「なに買ったの？」

「うん、安物のワイン。さあ、これで能率が上るぞ」

ベッキーはクスンと鼻を鳴らして笑った。

事実、それからは作業は思っていた以上にはかどった。荷造りをしながら、ひろみに聞く。

「いわゆる、カルチュアーションショックってのは無かったか？」

「ほとんど感じなかったわね。使用後のトイレの扉をあけておくことぐらいかな」

「あれは日本の習慣には無いものな」

「カルチュアーションショックを受けるとすれば、むしろ日本へ来たアメリカ人の方じゃないかしら。アメリカ人、殊に白人は妙な偏見というか優越感を持っているでしょ、アメリカが最高なんだっていう……。それが日本へ行ってみると、自分の国で買える物は大抵そろっているし、食べ物なんか、同じ銘柄でも自国の物より、ずっと日本製の方がおいしいのでショックを受けるわけ。例えば、某社のハンバーガー、フライド・チキン、あれにしたって日本の方がずっとおいしいわ。自動車もオートバイも、カメラにしたって電器製品にしたって、なにを取っても日本の物の方が優秀なんだから」

そう言われれば、若者が乗り廻しているオートバイはおろか、白バイのそれもすべて日本製であつたし、アメリカ人の持っているカメラの大方は日本製だった。

「デトロイトの自動車工場へ勤めている人たちだって、内心は日本製の車を欲しがってい

ると思うわ、普通の人より性能がいいことは充分知っているんだもの」

なんだかんだと話し合っているうちに、三日後の午後、どうやら荷物はまとまった。十三箱であった。それでも辞書類と縫いぐるみの兎などの大部分は、イエガー家に預かって貰うことになってしまった。

「どうせ、ひろみはすぐ帰ってくるんだろうから……」

イエガー夫人はそう言って、気持ちよく引受けてくれた。

「ミセス、私も是非そうしたいわ」

調子に乗って、ひろみもいい気なものである。

ただ、アメリカ移民の話を書いた井上靖さんの小説「わだつみ」(既刊三冊、これは前回渡米した折、読んでおけと言って渡したものである)だけは、少々重たかったが、私が持ち帰ることにした。もう一度読んでみたかったのである。

「五、六回読み返したかしらねえ」

私がトランクに詰めているのを見ながら、ひろみは感慨深げであった。共鳴する何物かがあったのであろう。

郵便局で十三箇の荷物を発送した後、やっとこれでアメリカの旅が楽しめるぞと思った私に、ひろみが言った。

「サンディエゴのデビーの所にも、まだ荷物置いてあるわ」

私はうんざりした。

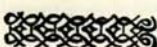
「それは帰りに訪ねた時、デビーのお父さんと相談しよう。彼に送って貰ってもいいし」

郵便局からの帰り道、この前の酒屋へ寄って、この前よりもちょっとだけいいワインを買った。

その晩の寝つきのよかったこと。私は久し振りに熟睡した。

(続)

浄土句集



一田牛畝選



子供らしく可愛い。

福岡 原 敬二郎
父の日や大人びて来し娘の子

福岡 松尾 るり
香涼し宝冠の弥陀御開帳

評 宝冠の弥陀とは――、二代將軍秀忠が

キリスト教徒を仏教徒とするために幡随上人を島原天草へ教化派遣した。上人が船に乗せて行かれた阿弥陀仏に宝冠を冠らせ給うたので、宝冠の弥陀と呼び、大本山善導寺の法主となった私は、この仏を念持仏として奉仕させて貰って参詣者に開帳して喜こばれている。香をさげ礼拝してみんな喜んで下さっている。

東京 新井 新生
想出や昔兵隊麦の飯

評 麦飯と兵隊は離れることの出来ないものである。麦飯ならまだよい方で、粟飯に高粱飯、私も輻重輪卒の一ツ星での満州時代を思い出す。

東京 栗原やえ子
樟若葉樹齡千年幣白し

評 樹齡千年の樟若葉とは実に巨きな樟なん。由緒ある樟で幣がからげてあって、へんぼんと翻り尊いこと。

東京 吉田ゆきゑ
輪なげの輪にぎりしまゝに昼寝せる

評 輪投げして、くたぶれて寝ている。輪は大事にしっかり握ったまま、如何にも

熊本 山崎遣迎子
現実の一氣に戻る昼寝覚
評 父の日の父への贈り物も、娘も大人びて来て段々違つて来る。一体何を父に送つたのかしら。

評 昼寝して夢の世界に遊んでいたのに、覚めて見れば、一氣に苦しみの娑婆に戻る。今少し夢が続けばよかったのに、くやしいことである。

三重 山田 歌甫
掌を振って別れを惜しむ立葵

埼玉 佐藤 泰子
雲低し役者顔して村祭

山口 上野 明達

うつらなる写経の文字むし暑く

旅の果て浜で売る鱈買ひにけり

竹伐つて腕節強き山法師

福岡 上滝津弥音

童女碑に鬼灯手向け月忌かな

送り来し新茶や和菓子殊のほか

十夜僧諷誦文に声取られたる

熊本 山崎 松子

朝まだき老鴛聞きつ作務樂し

廻り道して豪邸の牡丹見に

御法主の色紙かゝげて梅雨の床

福岡 服部 光代

開帳の燭に慈顔の観世音

旧家址人手に渡り草茂る

黄昏にひたすら流る鉾山の水

福岡 荒牧 還愚

五月晴御堂の大扉開け放ち

梅雨ながら心晴れ／＼念仏して

なめくじの蠢き進むひたすらに

東京 真野 竜

五月晴納経終えし若夫婦

轉も弥陀の御声と静心

日のぬくみある夏菜束の甘さかな

東京 猪瀬 幸子

うす紙のうすき憂ひの枇杷うるう

風鈴の音けたたまし雨予報

むらさきは一色ならず菖蒲

東京 吉原登起子

朝の風緑目にしむ空青く

当直の飯頂し日の懐しく

秋の蚊や法主は女人御禁制

敬老の日に思う

福嶋瑞江

人のよく知るイソップの寓話に、次のような一篇があ

る。夏の間、美しい声で歌ってばかりいたきりぎりすは、寒い冬がくると、何一つ蓄えもなく食べるものがない。そこで、暑い夏のうちにせっせと働いた蟻に物乞いする始末となる。これは一般に労働の尊さを教えた教訓となつてゐるが、実際は老後の問題、そして福祉の問題なのである。そのために、時代の変遷に伴う人々の意識の変化によつて、蟻が食物を喜んできりぎりすに与えるものと、お前なんか餓死して了解と門前払いをくわせるものと、その結論が二通りあるのは興味深いところ

だ。

毎年七月になると、厚生省から平均寿命が男性では何歳、女性では何歳になったという発表がある。わが国ではここ何年間に、この平均寿命は確実に伸びつづけている。今年は男は七十四・二二歳、女は七十九・六六歳、どちらも最長記録を更新した。人はひとたびこの世に生を受けたら、一日も長く生きていたいのが大方の真情であらう。そのためには、この平均寿命の延びは、まことに慶賀の至りである。

それがまたどういうものか、この数字を見ると、

余り一方的に喜んでばかりいられないという気がしてくる。とくにお年寄のいる家庭では、だからあなたは後何年ですよ、と宣告されているようで、老人にはむごい数字だそう。中年熟年にとっては、後まだ何年ときかされて、いささかその遠望に戸惑いを感じてしまう。そして最近の若年層の幼児化などというのも、この寿命の延びに關係があるともいわれている。

しかし、一番やかましく論じられているのが、高齢化社会という問題である。後二十年たつと五人に一人が老人になる。そのときは、その対策は、と誰もが考え、そして少々怯えている感さもある。もちろん、こういう高齢大國へ、とくに工業先進國では前例のないほどの急テンポで突進しているわが國では、雇用の問題、医療の問題、はたまた家庭の問題等々問題が山積しているから、人々が一抹の不安を感じるのもやむをえないことだ。

人は生まれ育ち、生き永らえれば、必然的に誰しも老いる。そして老いは、往々にして悲哀に通じる。積尊が四門出遊された際に、真先に突きあたられたのも、この老いの現実であった。それなら、このいやがうえにも平等に確実にくる老いに対して、私たちはどう立ち向かっ

たらよいのであろうか。いや立ち向かうなどというより、どのようにこの自らの老いと付き合ったらよいのだろう。それはとりもなおさず、今、若いうちに、まだ自分が若いと感じているうちに、お年寄りと上手に付き合うことにほかならないと私は思うのだが……そして、もっと大切なことは、年老いたと自ら感じたとき、この逆ができるということである。日本では、人も自分も年齢を気にしすぎる。年齢と老化には個人差がある。他人から、「あなたは老人の部類ですよ」と指摘されなくても、自分が年老いたと自然に感じる 때가くるものだ。古い諺の言う通り「青年に知あり、老人に力あれば……」であらう。

私が初めてフランスに行ったとき、何より驚いたのは、老人の多いことだった。街でも公園でも、老人の姿がやたらと目についた。それを、この國に住み馴れた日本人が、「いや、日本では年寄りは大方家に引き籠っているけど、フランスでは年寄りもごく普通に外に出てくるから」と説明してくれた。たしかに、その通りに違いない。夏の夕暮、パリの街角のカフェで、長い陽しさを浴びて老夫婦が静かにビールを飲んでいる。次の日もま

た、同じ店の同じ椅子に彼らを見かける。訊けば、このカッブルは毎日こうして、一日のひとときを楽しむのだそうである。

もちろん、経済的な余裕も云々されよう。今やフランスは、国家を規準とした経済力で日本には劣っているとはいえ、個人の資産力では、日本人がいくら「中の中」を自認しても遠く及ばない。アル中にでもなつて身をもちくずさないかぎり、人それぞれにふさわしい老後が送れる。それに高率の年金制度や政策としての福祉の面でも格段の差がある。かれらが二言目に口にする社会生活の上・中・下のクラスのうちで——このランクづけは税務署が決めてくれるのだそうである——下に入る独り暮らしの老人が、かりに倒れたとすると、すぐ政府からヘルパーが派遣されてくる。そして入院その他の面倒も一切見てくれる。ところが中の部ではそういうことにはならない。自力で人を雇うか、身内のものが世話をするのである。だからフランス人に言わせると、中は割が悪いのだそうだ。

しかし、この福祉も政府まかせにばかりはしていない。フランス人は親類づきあいの非常によい国民であ

る。親兄弟は言うに及ばず、従兄弟、又従兄弟までが互いに招きあい、独り暮らしの老人なら車で迎えにきて、一週間なり二週間なり、あたたかくもてなしもする。

そして、なんと言つても宗教がこの点では力を發揮しているのだ。聖書にある「よきサマリヤ人の譬」が生きている。私はある夏修道女の紹介で、ブルターニュの海岸にある「憩いの家」に泊めてもらったことがある。着いてみてびっくりしたのは、百人近い泊り客のうち、ほとんどが七十歳前後の老人で、若い人は四、五人しかない。三食つきで、浜までは地続きである。宿泊料はごく安く、食事はまことに美味しく、口うるさい連中がこぞってここは「小さな天国だ」と讃嘆していたほどだ。修道女が二、三人と、アルバイトのような若い娘さんが二、三人働いている。そして、何より感心したのは、ここにきている老人たちは、みな普段は子供や孫と暮らしているのだが、せめて夏休みぐらいは家族から解放されたいからと口々に言っていたことだ。裏を返せば、家族を老人から解放しているのである。

もちろん国立の養老院にも立派なものがある。そこはフランス人が笑いながら言う、いわゆる「墓地へのかけ

橋」なのだろう。しかし老人であっても、それなりのレクリエーションがなければならぬ。それは老人を次の世代から隔離してしまうことではない。ブルターニュの場合など、一週間に一度は息子が嫁や孫たちを連れて会いにやってくる。その日を楽しみに、おばあさんたちはお菓子などを用意して待っているのだ。たまたま私が日本からおせんべいを持参していたので、同じテーブルにいた人たちに、食後に一つずつ供したところ、そのうちの一人の婦人が手をつけようとしぬ。私が訝かると、にこにこして、「あさって孫がきますから、珍しい日本のお菓子を食べさせたい……」と取っておかれるのだった。ちなみに、この老婦人の亡夫の姉君が、北大教授の故大里博士夫人となられた方で、当時の国際結婚の秘話なども話してくれた。

ところで、ブルターニュの「憩の家」にニースからきていた三十歳ぐらいの女性がいた。フランソワーズといって、保険会社に勤めている。非常にてきぱきした人だった。彼女は同じニースから母校の先生をしていた七十歳すぎのギリシャ語の教授を自分の車で連れてきていた。彼女がここへ来るからといって誘ってきたのだそう

である。この先生はご主人に一年ばかり前に先だたれ、老後は引退先に選んだニースでの独り暮らしを強いられ、何かにつけては亡夫を偲んで泣いてばかり、それでも浜で一夜大スベクタクルが催され、売れっ子の歌手が出演したときには、夜中の一時すぎまで夜風に当たって見物していたというから、十二時前に早々に引き上げてきた私などより、余程強いと言えるかも知れない。

それから一カ月後、私はこのフランソワーズとニースで逢う約束をした。彼女が連絡がうまくつけば、一日あのあたりを車で案内すると言ってくれたので、その好意に甘えたのである。約束の日の朝、彼女が車で迎えにくてくれると、後の座席に一人の老夫人がすでに乗っている。私は早合点して彼女の母上かと思うと、やはりこの婦人も独り暮らしで、たまたま日本人を案内するから、一緒にドライブしてはと誘ったのだという。ただし、座席は後ですよ、と念を押されている。あの国では、助手席が一等席なのである。フランソワーズは異国の客人に一等席を提供して、老夫人は、最初から最後まで、あなたは後だと言い切った。

私たちは三人で、ニースからアンチープ、ピオそして

サン・ポール・ヴァリスと都合三つの美術館を見て廻り、昼食は各自手もとのお弁当を浜べで開き、唯一の贅沢はおやつにクリーム・パッフェを食べたぐらいのことである。私は、この日は二つの感動を覚えた。ピカソやレジェ、また運よく出逢ったボナールの大回顧展の現代芸術に直接触れたことと、フランソワーズの地道な社会奉仕の精神とである。

元東大総長の茅誠司氏が「『時世が代ると福祉を価値観が変わる』と言う人もあるが、自分はそうは思わない、自分のことばかり考えないで、他人のことを考えて……というようにならないと、本当の幸福は得られない」とテレビで発言されていたのを聞いて、私はあのニースでの一日を、フランソワーズのささやかな行為を想い出していた。しかし、このささやかな行為を心がけること、これを実行し続けることは、なかなか誰でもやれるものではない。日本も今や車社会、どんな細い道でも車優先で歩行者は片隅に押しやられてしまふ。車をもつて、こうして一人暮らしの老人を慰めようとする人が、一体日本に何人いるだろうか。みんな忙しいから、忙しすぎて他人のことは構ってられないのだろうか。グル

ープでなら、集団でならなんでもやるが、個人ではやりにくいからか。

友よ、布施するのはよいことである。

たとえ僅かばかりでも布施はいいことである

信仰をもって布施することは素晴らしい

僅かなりとも信仰によって布施するものは

他人の利益をはかることで（自ら）安楽となる

と、『阿含経』に記されている通りである。そして、法施、財施、無畏施の叶わぬものは、無財の七施が教えられている。フランソワーズのはさしずめ房舎施の現代版とも言えようか。

しかし、こうして布施を受ける老人の側にもこれに答えるものがなくてはならない。電車の中で席が譲ってほしいれば、まずわが子をして席を譲る人間に育てるべきである。

何れにしても、藤村の言ったように、人は「美しく年を取りたい」ものだ。

◎『浄土』表紙版画絵販売についての案内

『浄土』誌の遅配が続いており、まことに申し訳ありません。

どうか今後ともまた、『浄土』誌の充実のために、会員諸兄の皆さまの暖かいご支援とご高配を心よりお願い申し上げます。

好評の『浄土』誌表紙版画絵は、大西耕三先生のご好意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただいております。額縁代も含めて、金二五〇〇円というお求めやすいお値段で、季節観に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えれば幸いです。

また、大きな方は、『浄土』表紙絵よりはずっと大きく、約20cm×30cm位の大きさですが、額縁の大きさでいえば30cm×50cm程の大変豪華な一幅となります。

なお限定販売のため、予定数に達しましたら、申し訳ありませんが、おことわりさせていただきます。しかし現在のところ、昨年度の分、正月号から十二月号までの在庫も充分にありますので、ふるってご注文願えば幸いです。

(申し込み先) 〒102 東京都千代田区飯田橋一―二―六

法然上人鑽仰会 振替(東京) 八―八二―八七

私の輪廻観

仏教では地獄(苦患)の世界より、仏さまの世界までを六道を巡りてといわれていますが、更に十に分けて十界とも申されています。

人間の世界だけがすべての世界ではないとおもいます。仏智も仏行も判らない人間が目先にとらわれて、その上物質的な教育が最も優れていると考えて人間の智慧で仏を推察しては大変です。仏さまは、法界身だと信じます、宇宙に偏満されている偉大な根源力だと信じています。弥陀選択の願心が釈迦牟尼仏

しまだ
島田 信一

(福井県大野市在住)

とあらわれて、私等に御化導くださっておられるものとおもいます。また如来さまが、此の世に、お出ましになられた御本懷は西方極楽に往生する要路(かんじんのみち)を示めそうとなさるのが最も肝要な目的ではなからうかとおもいます。

いま申あげました六道界また十界の世界の最極は仏界(浄土)ですが、此の浄土に往生するにも救われ難き因縁(輪廻)があるのでないでしょうか。

先づ自分の我を、押えることが悩みを最小



限にすることの、唯一の道ではないでしょうか。これが仏さまに生かされて生きる者が姿であり、悪い輪廻との縁も少くなるとおもいます。

現世の因果も三世の因縁で、又三世の煩惱の因縁だともいいます。われわれ人間凡夫の智力ではとうてい叶うことも出来ません。そこで仏さまの大慈悲にすがり、苦患ある輪廻を少くするために、仏さまに帰依することでしょう。仏さまの蓮台座（うてな）について述べてみますと、蓮の花の種（来世）は、すでに花の蕾の中に宿りております。花が開くと同時に立派な成熟した種（二世）となります。蓮の花には雄しべ雌しべがありません。花が親さまで、親が世に出ると共に二世（来世）が育っているのです。仏さまはわれわれに現世の強健（花の開く期間）の時に未来をつくれと教えておられるとおもいます。

この蓮花の教えと美しさ生命力の強さとは、我々凡夫も何か感ぜずにはおられません

ね。三毒の煩惱（欲望）を野放しさせると、必ず「むさぼり」や「にくしみ」が出て来て、毎日の暮しが、どこかで又なにかに振り廻される。この欲望に振り廻されると社会や他人のことを考えなくなり、「うらみ」や「苦しみ」を他の人にあたえる。これが遠い原因（因縁）となって、めぐりめぐりて、その人のもとに戻ってくる、これが輪廻というのでしょうか。ただ当人が気付かぬだけで、これを気付かせてくださるのが仏さまの教えではないでしょうか。善因善果、悪因悪果と言うことも輪廻の姿の一つとも言えるでしょう。仏さまの欲望は一つに大きな、お慈悲の願いだと思えます。すべてのこの願いが、すべて他に利することが根本だと思います。私たちが少しでも、この欲望を他に振り向けられたら誠に有り難いと思いますが、なかなかそんなことは出来ません。それならせめて私たちは、とても生れ難い人生に生かされてこの恵みの中の今の幸せ、今日与えられた無事な一日を仏さ



まの光明として受けとめることが出来たら、その人は真の恵まれた人と言えましょう。

此の御恩を、この身に感じる時又その御恩を受けた幸せを少しでも社会に、お返し出来たら、その意義は誠に大きいと思います。

人は一人では生きることがとても出来ません。家や社会の一員としての場合にのみ生きて暮せるのであります。

一、日常生活の中では利潤追求（報酬）があつて当然だが、お返しが出来て、その心掛けがあれば、衆生は必ずこれに反応があると信じます。

一、奉仕の心掛けこそ永遠の繁栄と現世の浄土も隣りになると信じます。

一、仏さまに帰依し感謝して暮しの出来る人の行いから良き輪廻がめぐり生じ、そしてその恵みに浴くすることが出来ると思ひます。

せめて隣り近所ぐらゐは朝晩の挨拶は笑顔で素直な言葉を交して暮したいと思ひ、そう

有りたいと願ひたいものです。ただ一念に仏さまのお慈悲を、この身にうけて、ただ有り難いとの心から出る念仏の自然の姿で「なにか知らないがさせていだいてゐる」と、ひそかに心に思つたとき、その人はお念仏の中に暮らせていただいてゐるのが真の姿ではないでしょうか。

仏さまは大慈大悲をもつて願行具足を成就されて、私共衆生を救われようとしておられます。なぜ私たちがその仏の浄土に洩らさず詣られず、十界のうちの、必ずあるべきところの六道三悪道の世界を巡り廻るのでしょうか。私共日常生活の心のあり方から意識される阿頼耶識も仏に近づき、仏の教えを素直に承りて暮らすことが出来れば、間違ひなく仏の浄土へ生れ往かさせて頂くことが出来ると信じます。皆さん現世で暮すうち、長い月日の心の有り方が来世で暮すことや、素晴らしい来世の世界を、つくり上げることは、自ら定めることと、充分考えてみましょう。

◎編集子記

猛暑の夏も過ぎて、日中は幾分かしのぎやすくなつてまいりましたが、それでも秋のお彼岸を迎えるまでは、本格的な秋を迎えることはできません。お互いに一日一日を健康第一に生活しなければなりません。『浄土』誌の読者の皆様、どうかご健勝で、ご多幸の毎日をお送り下さいませ。

さて寺内大吉先生の十年に及んだ長期連載『念仏ひじり三國志』が完結し、編集子は今安堵の胸をなでおろしています。しかし誌面の方を充実させて行くことは、なかなか大変です。どうぞ心ある皆様、『浄土』誌誌面充実のためにお力添え下さい。何でも結構です。鉛筆を取って、原稿用紙に向つて下さい。ご寄稿をお待ちいたしております。

(K生)

村瀬 秀雄 著

|| 好評三刷 ||

『全 訳 法然上人勅修御伝』

B 6判 八四七頁 価六八〇〇円

|| 好評重版 ||

『和 訳 浄土三部経』

B 6判 四七四頁 価二五〇〇円

『和 訳 法然上人選 択集』

B 6判 三八七頁 価二五〇〇円

『和 訳 善導大師 観經四帖疏』

B 6判 五八四頁 価三五〇〇円

『和 訳 善導大師 六時礼讃』

B 6判 二六五頁 価二四〇〇円

取扱い 法然上人鑽仰会

(仏)
(教)
(行)
(事)
(一)
(年)

九月の行事

太田・大光院開山忌と吞竜信仰――

驚^{わし}見^み定^{じょう}信^{しん}

九月の七、八、九日の三日間にわたって、群馬県太田市にある浄土宗の檀林であった大光院で、開山忌がいとなまれる。大光院の開山は、かの有名な吞竜上人である。元和九年の八月九日に六八才で入寂された。高德の僧であった。それは単に、浄土宗門の中で、優れた地位にあったというだけではない。「吞竜さま」と通称されているように、一般庶民にも人気のあった高僧といふことである。

大光院は徳川家の祖、新田義重公を祀るためにたてられた寺院である。関東の浄土宗十八檀林として、浄土宗内の名利寺院として知られている。しかしより一般的には、「子育て吞竜」として知られている。庶民信仰の寺でもある。

今月は、大光院に生れた吞竜信仰の実態をみて、仏教行事の側面を考えていくことにする。

〈吞竜上人〉

吞竜上人は弘治二年（一五五六）に、埼玉県春日部に生れた。隣村にあった林西寺で得度、修行をし、長じて増上寺に進んだ。増上寺十一世雲蒼円也、十二世源誓存応に師事して、俊才のはまれが高かった。とくに存応の信頼が篤く、徳川家が日光院を創建するのにあたって、住職として推挙されたのである。

この経歴をみると宗門のエリートであったことがあきらかである。その反面、民間につたわった伝承では百万遍念仏を修して雨を降らせ（雨乞吞竜）たり、名号の一字をのませて産死を救った（はいふく名号）ことが残されている。こうした現世利益的側面をかねそなえていることが吞竜信仰の特長である。とくに「とり子」伝説は吞竜信仰の中核をなしている。

吞竜上人が日光院に入山したころは、凶作や飢饉によって人びとの生活は困窮をきわめていた。墮胎や間引きは、やむをえぬことながら人びとのなかにひろがっていた。

こうした悪習をうれいた吞竜上人は、幼児を日光院に

ひきとる決意をした。日光院は徳川家より三百石の給付が約束されていた。しかしこれは本尊への供米である。吞竜上人はあえてこれを幼児の糧としたのである、と伝えている。これが「とり子」伝説である。

現在でいえば、さしずめ社会福祉事業を行ったといえるだろう。

これらの伝承が事実かどうかということは、確実な資料をかいているため明らかではないといわれている。しかし禁制の鶴を殺した源次兵衛の伝承は、史料にもみえていて事実であった。有名な話だがあげてみよう。

大宮に住む源次兵衛という郷土の子がいた。父の病いを治すために鶴の生血が効果があると知らされた。禁制の鶴であったが、これを獲ったのである。このことはすぐに役人の知るところとなった。源次兵衛は日光院に逃げこんで救いをもとめたのである。吞竜上人は源次兵衛をかくまったのである。日光院は御朱印寺院であったから、むやみに役人が介入することができなかった。領主であった館林公は江戸の幕府に報告して力添えをもとめた。老中五人の連署のもとに、源次兵衛の逮捕をさまたげた農民、僧たちのひきわたしをもとめたのである。吞

竜上人はこのことを知るとすかさず、源次兵衛を弟子としての大光院を出たのである。上人は全責任を自ら負ったのである。元和二年のことと伝えている。吞竜上人が大光院に再住するのは元和七年である。この間をおもに小諸の草庵ですごしていたのである。

吞竜上人が大光院の住職であったことと、小諸の草庵に閉居していたこととの間には大きな落差がある。この落差が後年吞竜上人を一宗教家のレヴェルにとどめず、神格化された「生仏」として崇拜させる要因であったようにおもわれる。社会的地位のたかい、つまりは偉い僧侶が世俗にかくれて遊行し、人びとに幸福を授けるという伝説は多いが、吞竜上人の五年間の穩棲にいくつかの靈驗譚が生まれているのも無関係とは思えない。

吞竜上人にとってこれまでの過程は恵まれたものであった、といえよう。そうした榮譽が一人の郷土の子をかばうことによつてうしなわれたのである。しかし本来的な徳は再び上人を大光院に迎えたのである。異例なこととおもえたであらう。吞竜上人にとって小諸での生活は苦ではなかったかとおもう。しかしこれをみつめる人びとの目には、不遇な時期と映つても当然であらう。吞竜

上人の大光院と小諸の草庵という対照は、人々に生き仏としてのイメージを託すのに充分な落差をもっているようにおもわれる。少くも吞竜上人が後年生き仏としてあがめられるのは、小諸での周辺体験がイメージをふくませてくれるからであらう。

吞竜上人は庶民信仰の対象としてあがめられてきてい

◇“浄土句集” 欄投稿要項

多くの方々のご投句をお待ちしております。大
本山善導寺のご法主、一田先生も大変にはりきつ
ておられますので、お友達などとお誘いあつて、
ふるって作句して下さい。

一 ハガキ一葉に四、五句づつお書き下さい
一 投稿先――

。〒812 福岡市博多区中呉服町10-14

正定寺 一田牛畝先生宛

。〒102 東京都千代田区飯田橋1-11-6

法然上人鑽仰会

る。しかし在世當時からそうであったのだろうか。いまいちど考えてみてもよいことであろう。少くも吞竜信仰とでもよべる現象は、明治になって大きなピークをみていることは明らかである。吞竜上人に対する崇敬が明治になって組織化されて、吞竜信仰が生れたと考えるのがいまのところ自然のようである。

〈子育て吞竜〉

吞竜信仰は子育てにとりなり安産・授名(寿名)、弟子入り、虫封じ、学童守護、学業成就がある。また農耕、養蚕の豊作、火伏せ、病氣治療などにもおよんでいる。

信仰圏も大光院のある太田市を中心にして関東地方に広く分布している。この実態は現在では、大光院の弟子入りと名づけ(授名)にみることができる。名づけは太田市内では年間にほぼ二、五〇〇名から二、六〇〇名が誕生しているが、その七〇%の人びとがうけているという。大光院の「授名日計表」をみると、毎年一、八〇〇名から二千名近くがうけていることがわかる。もう一つは弟子入りである。「御弟子入り日計帳」をみると、毎年三百人から五百人程度の子供が「弟子入り」をしている。弟子

入りの期間は三年、五年、七年が中心である。年齢も七歳までが大半であるが、まれに十五、六歳の子供もみることが出来る。「弟子入り」する動機は身体の弱い子供がほとんどである。今は行われていないが、かつてはボンノクボの毛を一部残すか、髪をそるのが普通だったらしい。

群馬県の民俗をたずねると「吞竜坊主」とよばれる習俗が記録されている。板倉町のばあいをあけてみよう。

吞竜坊主(道心坊、七ツ坊主、五ツ坊主、チョッポコ)

生児が健康で丈夫に育つようにと太田市金山大光院(通称吞竜講)に、開山の吞竜上人の弟子として五歳から七歳までに願をかける。この弟子入りには父親のお椀の糸尻に水を入れ、その水で剃り落す。男子の場合は後頭部の首筋の「ボンノクボ」と云われるところの毛の一部を残す。女子の場合は頭部の中央部の一部を残すところと、それに加えて後頭部の一部を残す場合もある。(板倉町基礎資料75—板倉町の民俗行事その二—)

弟子入りの形としては頭をそる。もしくはその一部を残すことが特徴となっている。この習俗は吞竜信仰独自のものではない。通常七ツ坊主といわれて全国に分布し

ている。この慣行に吞竜信仰が重ねられて、吞竜坊主と
いういい方が生れたのである。

〈吞竜信仰〉

吞竜信仰の主たる内容は子育て信仰であった。しかし
明治になって何故流行したのであるうか。二つの要素が
ある。一つは吞竜講（正式には故信講）の結成があげられ
る。もう一つは分身所の拡大である。

吞竜講は明治九年に結成されている。地元の有力者を
世話人として、大光院六十三世日野靈瑞が組織したので
ある。最盛期には十万人の講員が数えられた。日野靈瑞
は講をつくるだけではなかった。分身所の拡大にも力を
そそいだようである。日野が大光院にはいるまでには二
カ所の分身所がみられたのみである。しかし日野が転住
する明治十九年までには約十六カ所に分身所が設けられ
ている。これによっても吞竜信仰に果した日野靈瑞の役
割がうかがえる。

つまり、吞竜信仰は、明治時代に日野靈瑞を組織者と
して、吞竜講と分身所の拡大とともに広まった庶民信仰
であったということができる。

長田芳一画 五雨みなこ文

絵本 ほうねんさま

B 6変型判／定価三〇〇円

右近れい子画 福嶋智誉編

絵本 おじぞうさま

B 6判／七二頁／定価四〇〇円

仏教まんが・教育図書

◎子供たちのやさしく、すこやかな成長を願
って、大人たちからのすばらしいプレゼン
トにご利用下さい。

大 道 社

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

電話〇三(二六二)五九四四 東京一―八二四七

◎読者の皆様へのお願い

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また、この機会に、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもありますが、誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時、「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞ振ってご投稿下さい。誌面充実のために、宜しくご協力下さいませ。

- 一、内容 自由（生活の一コマや所感あるいは思うことなどをエッセイ風におま）
- 一、枚数 四百字用紙五枚程度
- 一、締切 毎月五日

法然上人鑽仰会

「浄土」購読規定

会費一万年 金三、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 四十九巻 九月号

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和五十八年八月二十五日 印刷
昭和五十八年九月一日 発行

編集人 宮林 昭彦
発行人 佐藤 密雄
印刷人 関 二三男
印刷所 長谷川印刷 鈔

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番
〒一〇三 振替東京八一八二一八七番

待望の本格ハム教／歴史巨篇／

毎日新聞社から好評のうちに全巻発売中!!

念佛ひじり三国志

—法然もやぶる人々—

寺内大吉 著

四六判・上製 全五巻 (各巻定価一三〇〇円 千各二五〇円)

直木賞作家が10年の歳月をかけて遂に完成

香り高い歴史ロマンの超大作

—第一・第二・第三・第四・第五巻発売中—

毎日新聞社

〒100 東京都千代田区一ツ橋一ノ一
振替(東京) 四一五六五三四

第四十九巻

九月号

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和五十八年八月二十五日印刷 昭和五十八年九月一日発行